

■大友皇子(弘文天皇)

おおとものみこ

..... 648=

天智天皇の皇子。父の後を継ぐべく、父の弟大海人皇子と戦い、大敗して自縊した(壬申の乱)。

生。天智天皇の皇子。母は伊賀采女宅子娘。生母の出身地名により伊賀皇子とも呼ばれた。大友の名は、のちの近江国滋賀郡大友郷に本拠のあった大友村主氏から皇子の乳母が出たことに基づくか。

..... 657= 9歳 :

白村江の戦い • 663=15歳 :

皇子が幼少時から近江国滋賀郡と関わりをもっていたとすれば、

..... 666=18歳 :

大津京遷都 • 667=19歳 :

*近江大津宮への遷居にも、すでに皇子を天智の後継者に擬する狙いがあったのかも知れない。「懐風藻」によれば、皇子は容貌・体躯ともに優れ、風采も広大かつ深遠で、唐使劉徳高は皇子を見てその容顏の非凡なることを看破したという。また皇子は、自身に捧げられるはずの太陽(皇位の象徴)が何者かによって奪い去られる夢を見、その不思議を中臣連(藤原)鎌足に語ったという。皇子は博学で諸分野に通曉し、文武両道にわたり才能があった。皇子の周囲には、つねに渡来系の学者たちの姿があった。

天智天皇没 • 671=23歳 :

*太政大臣に任命される。天智の崩御にのぞみ、大海人皇子(のちの天武天皇)が吉野に去った後、皇子は大津宮の内裏西殿の織仏像前で、左大臣蘇我臣赤兄以下の5大官とともに、みずから香鑪を手に取り、天智の命に違ふことのない旨を誓った。天智が崩じると、皇子は事実上、近江大津宮の主となり、大海人を牽制すべく、天智の山陵造営のための役夫徴発に名を借り募兵を展開、宇治橋の守衛者に命じて大海人側の私根運搬を遮断するなどした。ところが吉野を脱出した大海人の行動は予想外に迅速であった。

壬申の乱 • • 672=24歳 :

*皇子は、直ちにこれを追撃せよとの臣下の献策を容れず、東国・倭京・筑紫・吉備の諸方面に興兵使を派遣したが、募兵は必ずしも皇子の企図したようには進まなかった。諸方面での戦闘は皇子に不利のまま展開し、近江国の瀬田での決戦のときを迎える。皇子は群臣らとともに瀬田橋の西岸に陣営を構え、総力を結集したが、大敗を喫する。左右大臣らとともに戦線を離脱、ついに山前の地で自縊した。時に、従う者は物部連麻呂以下1, 2の舎人のみであった。

皇子の首級は、美濃の不破宮に本営を置いた大海人のもとに送られた。その墓は大津市御陵町にある長等山前陵に比定されている。皇子の妃に大海人と額田女王との間に生まれた十市皇女があり、葛野王をもうけている。「懐風藻」には皇子の詩2篇が収められている。天智の崩後、この皇子が即位したと見る主張が平安期の文献にみえ、特にこれが幕末期に高揚し、これを受けて明治3年(1870)7月、弘文天皇と追諡されて歴代に加えられるにいたった。またその後、皇子の即位そのものは認めず、天智皇后の倭姫の即位あるいは称制を想定する理解も示された。